

編集者と語る「本間一夫と日本点字図書館」 岩波新書『指と耳で読む』の原稿

2015年は、日本点字図書館創立者の本間一夫生誕百年に当たります。最近、本間氏の著書『指と耳で読む』の入稿原稿が発見され、初校ゲラをはじめ多くの資料が残されていることも判明しました。そこで本講座では、担当編集者や本学教員のナビゲーションのもと『指と耳で読む』の出版に至る背景理解を試み、本間氏と日本点字図書館の世界に迫りました。冒頭では、本学短期大学部 日本語コミュニケーション学科主任 佐藤辰雄教授がご挨拶を行いました。



佐藤 辰雄氏

実践女子大学短期大学部
日本語コミュニケーション学科 主任



企画担当・司会：西脇 智子氏

実践女子大学短期大学部
日本語コミュニケーション学科 准教授

《講演》『指と耳で読む』の編集

1980年に出版された本書の担当編集者が、企画立案の経緯から出版後の反響までを、舞台裏のエピソードを交え振り返りました。また、書名が『指と耳で読む』と定まるまでの変遷についても紹介されました。

講師：坂巻 克巳氏 (元岩波書店 新書編集部 編集長)



■点字の意義を教えてください一枚の写真

〔新書『指と耳で読む』の原稿〕



▲本づくりに携わった編集者の方の話を聞きに、多くの方が来場されました。

と題した、約20ページに及ぶ本間さんのインタビュー記事が掲載されたことです。この記事を読んだ新書編集部の者たちによって新書発行する企画が持ち上がったのです。

編集担当となった私に、本間さんが資料を提供してくださいました。その中に、「盲児の楽しい読書」と題された一枚の写真がありました。点字図書館を読む子どもが口元に笑みを浮かべて本の世界に浸っている様子をとらえており、点字はこうにして読書の喜びを目の見えない方々に伝えているのだと、強い印象を受けたことを覚えています。

■通常とは異なる流れで進められた執筆

本の内容や構成については決まっていたため、どんどん書き進めたいだくよう本間さんをお願いしていました。とは言え視覚障害の方の著書ですから、通常の本づくりとはいろいろと事情が異なります。例えば執筆については、本間さんは点字器で原稿をつくります。ある程度まとまると音読し、アルバイトの方にその内容を書き取ってもらいます。その後、本間さんの補佐役を務められていた加藤善徳さんがチェックしながら清書します。本間さんは学齢期前に失明したため漢字を学んでおらず、人名や地名などの確認に加藤さんはずいぶん気を遣われたのではないかと思います。どんな著者にとっても執筆は大変ですが、本間さんやその周辺の方々の場合は通常とはまるで違う苦勞があったのではないかと想像します。

■書名決定までの事情と苦勞

出来上がった原稿はとても完成度が高いもので、私が手を加えるところはほとんどなく、スムーズに印刷所に入稿しました。その後出た校正刷り(ゲラ)を著者や編集者、校正者で改めて確認しました。本間さんは加藤さんに音読してもらい、言葉の削除、付け足しなどを相当量行われました。

こうして編集作業は終盤に差し掛かりましたが、書名がまだ決定に至っていませんでした。岩波新書は背表紙に副題が表記されないため、単体で内容が伝わる書名にする必要もありました。私は『闇の中の読書』という題を提案しました。すると本間さんは、「視覚障害について語る中で、“闇”や“暗黒”という言葉がよく出るが、私自身にはそんなイメージはまったくくない」と却下されました。確かに、そういった言葉は独特の否定的な意味合いを感じさせます。自分は視覚障害の方々の感覚や世界を全然理解していなかったのでは、と思いました。

■日本点字図書館や点字の理解浸透に貢献

最終的に『指と耳で読む』というタイトルに決まりました。点字図書館というと一般の方々には点字図書館だけを扱っていると思うかもしれませんが、実際は録音図書も非常に多く、また点字図書よりも利用される傾向にあります。そうした実情を理解してほしいという思いに基づく案で、本間さんも「これが一番いい」と言ってくれました。

そして日本点字図書館の創立40周年記念日でもある1980年11月20日、『指と耳で読む』が発行されました。反響は非常に大きく、多くの新聞や雑誌でこの本が取り上げられるとともに、「録音図書にしたい」という問い合わせも、各地の図書館から本間さんのもとに多数寄せられたそうです。

発行から35年を迎えたこの本は、今でも多くの方に読まれるロングセラーとなっています。2015年は本間さんの生誕百年に当たる年です。これを機に、本間さんや日本点字図書館がより広く知られるようになればと願っています。



▲講座当日、来場者の皆様に配布されたレジュメと点字資料。

《講演》当事者の想いを伝えつづける

障害や病気などを持つ当事者が記した本は、読者にとって、また当事者本人にとってどのような意義があるのか。視覚障害者や筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者の書籍を編集した経験を持つ講師に、編集者の視点から語っていただきました。

講師：坂本 純子氏（岩波書店新書編集部編集委員 前編集長）



■当事者が「自分で綴る」ことの大切さ



▲「『指と目で読む』の存在が自らの進路に影響をもたらした」と語った坂本氏。

私は先頃、日本点字図書館の現理事長である田中徹二さんの著書『不可能を可能に一点字の世界を駆けぬける一』の編集に携わりました。田中さんは「6点点字」という手法を使い、パソコンのWordソフトで原稿を執筆されました。何らかの障害を持たれたり病気をされた方の体験を取り上げた本はたくさんありますが、少し前までは、ご家族など周囲の方、またはライターが執筆することが多かったのではないかと思います。しかし私は、当事者本人が書くことがとても大切だと思います。当事者にしかわからないものがたくさんあること、家族やライターが取り上げなかったことが実はとても重要な要素である場合がままあるためです。

■当事者による書籍の刊行はどのように広まったか

2003年、社会学者の上野千鶴子さんと、脊椎損傷者の中西正司さんが岩波新書で『当事者主権』を発行され、その中で「問題を抱えるだけではなく、何が自分たちにとって社会的に不足しているのか、どんなことが必要なのかを提示し、皆に伝えられる人」と「当事者」を定義しました。

当事者運動と当事者研究が日本で広まったのは1990年代のことです。出版界の風潮も変化し、当事者による書籍が多数刊行されました。私も、筋萎縮性側索硬化症（ALS）の方35名（ご家族を含む）の手記をまとめた本を編集しました。ALS発症後、患者の方は多くの決断をしなければなりません、従来は先達となる当事者の声が多かった世に出ていなかったため、参考にするのができませんでした。しかしこの本が出たことで、読者は当事者たちの体験から学べるようになりました。当事者の方に話を伺うと、「思いを言葉にしたことが自分にとっても力になった」という声がとても多かったです。

■誰もが当事者になり得る時代に

今、当事者の方々が積極的に外に出て講演会を行ったり、当事者同士の集まりを持ったりしています。同じ障害や病気を持つことで理解し合え、支え合える部分がたくさんあり、それがまた新たなネットワークを生み出すことにつながっています。

現代は、誰もが当事者になり得る時代です。例えば、車いすやベビーカーを使って外に出る方が増えたため、エレベーターの設置が多く駅の駅で進められるようになりました。いろいろな方が当事者として声を上げることで、社会のあり方が変わってきているのです。最近、私がとても重要な動きだと感じるのは、認知症の当事者として発言される方をよく見受けられるようになったことです。こういう方々が記した本から、私たちは非常に多くのことを学べます。

当事者の方が本をつくることには大きな意義があると感じています。私は編集者として、これからも積極的にそうした本の企画編集に携わってまいります。

《講演》草創期の読書傾向

日本点字図書館は草創期、「日本盲人図書館」の名で、1940（昭和15）年11月から1948（昭和23）年3月まで貸出事業を行っていました。第二次世界大戦・太平洋戦争をはさむこの時期の蔵書リストを本学教員が紐解き、その蔵書傾向を語りました。

講師：小林 修氏（実践女子大学短期大学部 日本語コミュニケーション学科 教授）



■近代日本純文学の名作をほとんど網羅

日本点字図書館の草創期（日本盲人図書館）の蔵書目録を拝見し、収められた点字図書の内容などについて、気づいたことをお話したいと思います。目録は1941（昭和16）年から1948（同23）年にかけてのものとなっており、この時期は第二次世界大戦や太平洋戦争の戦中戦後に重なります。

掲載されている図書数は864点。明治時代に活躍した夏目漱石や森鷗外から、自然主義の島崎藤村、耽美派の永井荷風、白樺派の志賀直哉、新現実主義の芥川龍之介などなど、幅広い作家の作品が収蔵されています。また、吉川英治や石川達三、丹羽文雄、吉屋信子など日中・太平洋戦争で従軍報道員を務めた作家たちの作品も点訳されています。

こうした傾向を見ると、日本近代文学、特に純文学の名作のほとんどを網羅した、実に良質な蔵書だと思います。リストには『罪と罰』や『カラマゾフの兄弟』など長編の外国文学もあり、よく点訳さ

れたものだと頭が下がります。

どういう本を底本として点訳されたのか推測しますと、昭和初期に1冊1円の「円本」として発行され爆発的に売れた改造社の『現代日本文学全集』や、岩波文庫など、手軽に入手できる本が寄贈され、これらが点訳されたのではないかと思います。蔵書目録には点訳者たちの名も記されていますが、多大な苦労があったことと推察します。この方々に、改めて敬意を捧げたいと思います。



▲専門知識を交えながら、どのような作品が点訳されているか解説された小林教授。